ふるき旅宿

漆原辰雄

〝古き町の古き旅宿のざくろ咲く〟

これは、昨年暮れに亡くなった作家椋鳩十（むくはとじゅう）の句である。私がはじめて彼にお目にかかったのは、いまから一三年ほど前の、昭和四九年八月の終わり頃ではなかったかと思う。椋鳩十の年譜をみると、彼はこの年「離島シリーズ（ポプラ社）執筆準備のため島めぐりを開始した」と書いてある。

彼が別府の浜脇に立ち寄ったのは、丁度その頃だった。

彼のいう「ふるき旅宿」の主人家近さんは、浜脇高等温泉の筋向かいの「塩久」旅館の主人だったが、私とは前々から懇意にしていたので、椋鳩十の来訪についても前もって知らされていた。

しかし、当時の私は、椋鳩十に関しては、ほとんど無知に等かった。

彼の作品のうち目をとおしたのは、野生動物の物語や山窩小説の一部ぐらいだったが、家近さんから「折角お見えですから」と誘われ、ともかく出かけてみた。宿には先輩の堀籐吉郎氏や別府大学（短期大学）教授の加地悦子さんらの顔も見えていた。

当日、薬師祭りで浜脇の街は、名物の見立て細工で賑わっていた。

それぞれ趣向をこらした展示会場を堀さんの案内でひととおり見てまわって、宿まで彼を送ったが、そこでどんな話しをしたかは定かではない。

ただ彼は過去に鹿児島の図書館長をやっていたことがあるので、多分その頃のことが話しの糸口になっていたかもしれない。

彼が鹿児島の図書館長に抜擢されたのは、昭和二二年一一月、四二歳のときで、退任が昭和四二年だから約二〇年間図書館活動をやったことになる。

彼流に言えば、尻の皮がむけるほど図書館に熱中したのだった。

その間、「母と子の二〇分間読書運動」など活発な運動を展開したが、これらの活動を支える予算面でも他県にひけをとらなかった。

例えば、昭和二八年度の九州各県立図書館の予算をみると、一位はお隣の宮崎県（館長は作家の中村地平）で一、三二〇万円、次が鹿児島の一、一〇〇万円、以下福岡、長崎、佐賀、熊本の順で、大分の二〇〇万円だったのがいまでも脳裏にこびりついている。

このように九州で優位を誇っていた図書館費も、ある年、査定で大幅に削減されかかったことがある。

そのとき彼は、知事に向かって「知事さん線香の火で風呂は沸きませんよ」と言い放って、ついにこれをくいとめたという話は、彼の人柄を伝えるエピソードとして有名である。

勿論、こんな話しは彼の口から聞いたわけではない。どこかで聞きかじったのを私が披露したまでのことだが、彼はこの件についても余りしゃべりたがらなかった。例によって「僕は図書館については素人だから…」を繰り返していたような気がする。

そんな彼と話していると、どことなく瓢々としたなかに、人なつこさとユーモアが感じられ、彼の人間的暖か味が直に伝わってくるようだった。

その彼が別府を去ってから間もなく鹿児島から葉書が届いた。「あれから山口県の見島に取材に出かけ九月五日に帰って参りました」と書いているところをみると、彼は離島の見島に取材に出かける途中別府に立ち寄ったのであろう。

それから後、椋鳩十と直接会ってはなしたことはなかった。一、二度電話で言葉をかわしたことはあるが、それはほんの事務的なことだった。

彼が最後に別府を訪れたのは、おそらく一、二年前のことではなかったかと思う。そのとき私は何かの都合でお目にかかれなかった。

彼が常宿にしていた「ふるき旅宿」の家近さん夫妻は、そのときどちらも他界していたのではなかっただろうか。

いまでは、その宿だけでなく、この町をとりまくすべてのものが、再開発の名によって新しくとってかわろうとしている。

彼がもし生きていたとしても、彼の心を慰めてくれたむかしの町は、もはや蘇ってくることはないであろう。